

2022年1月2日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 118 : 22～25

ルカによる福音書 20 : 9～19

「捨てた石が親石に」

<律法学者たちと祭司長たち>

今日の聖書の御言葉は、新年早々、あんまり喜んで聞きたい御言葉ではないな、と思われるかも知れません。後味の悪い、たいへん重たい、たとえ話です。

9節には、イエスさまは「民衆に」対して、この「ぶどう園と農夫のたとえ」を話された、とありました。しかし、このたとえ話は、最後の19節でこう語られていました。「そのとき、律法学者たちや祭司長たちは、イエスが自分たちに当てつけてこのたとえを話されたと感じいたので、イエスに手を下そうとしたが、民衆を恐れた。」

つまり、イエスさまは、このぶどう園と農夫のたとえを通して、律法学者たちや祭司長たちの、イエスさまに対する否定的な態度を指摘しておられるのです。

このたとえは、受難週、つまり十字架に架けられるまで一週間を切る中で語られました。

イエスさまは、まことの人となられた神の御子であり、神さまに遣わされた救い主として、エルサレムに「平和の王」としてやって来られました。イエスさまはこれから、すべての人の罪を贖うために、ご自分の命をささげようとしておられます。そうして、世のすべての人々を、罪と死の支配から、神さまの恵みと命の支配へ。神の国へと、招いて下さるのです。

このように、神さまがすべての罪人のために、救い主を遣わし、救いの御業を行なって下さることは、旧約聖書の時代から、預言者を通して、神の民、イスラエルの人々に告げられて来ました。そして、これからまさに、イエスさまは救い主としての御自分の使命を果たそうとしておられるのです。

しかし、神さまの御言葉を最も良く学び、人々に指導する立場である律法学者たち。また、神殿で礼拝を取り仕切り、人々を導く立場の祭司長たちは、イエスさまが神の御子であること、また救い主であることを受け入れたくありません。

なぜなら、これまでイエスさまは、律法学者や祭司長たちが、神さまの本当の御心を理解していないと言って、厳しく非難してこられたからです。彼らはプライドを傷つけられました。一方で民衆は、イエスさまの話喜んで聞いています。彼らはイエスさまに非難された上に、民衆からの人気を取られたと思い、酷く妬んでいたのです。

律法学者や祭司長たちにとって、イエスさまはもはや邪魔者でしかありませんでした。

19章の最後、47～48節ではこのように語られていました。

「毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。」もはや、イエスさまに対する殺意が膨れ上がっていました。

そんな中で、イエスさまは今日のたとえを話されたのです。

<ぶどう園と農夫>

今日のたとえはこう始まります。「ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。」

「ぶどう園」とは、旧約聖書においては神の民、イスラエルの人々を表します。その神の民は、当然、神さまのものです。ですから、ぶどう園を作った、ぶどう園の持ち主、主人とは、天の父なる神さまを意味しています。

主人は、これを農夫たちに貸して、長い旅に出ました。農夫とは、ぶどう園を手入れし、管理する者。それは、律法学者や祭司長たちなど、イスラエルの指導者たちです。

つまり、神さまは、ご自分の神の民を、選ばれた指導者に託し、信頼して任せられた。委ねられた、ということです。

さて、通常のぶどう園は、農夫たちに預けられた後、収穫になると、本来の持ち主である主人がその分け前を受け取ることであります。何も、主人が全部搾取してやろうというわけではありません。農夫たちは、ぶどう園を貸してもらって、生活が支えられ、糧を得させてもらっているのですから、主人にその収穫の一部を渡すのは当然のことなのです。

しかし、イエスさまのたとえでは、主人が収穫を受け取るために僕を送ると、農夫たちはこの僕を袋だたきにして、何も持たせないで追い返した、とあります。

農夫たちは、収穫をすっかり自分たちのものにしたかったのです。

そこで主人は、ほかの僕を送りました。すると、農夫たちはこの僕をも袋だたきにし、侮辱して何も持たせないで追い返した、とあります。今回はさらに侮辱も加えました。

それでも主人は、三人目の僕を送りました。すると農夫たちは、この僕に対して、今度は傷まで負わせてほうり出したのです。

この主人の僕は、旧約聖書の預言者たちと言って良いでしょう。彼らは神さまの御心やご計画を告げるために遣わされてきましたが、全く受け入れられなかったのです。

こうして、自分が遣わした僕をボロボロにされ、手ぶらで返された主人は、こう言いました。13 節「どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。」そうして、ぶどう園の主人は自分の愛する息子を、農夫たちのところへ送ります。愛する息子とは、神さまの愛する独り子、イエスさまのことです。

ところが 14 節「これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。」そう言って農夫たちは、息子をぶどう園の外に放り出し、殺してしまいました。これは、律法学者や祭司長たちが、イエスさまを殺そうとしている。まさにそのことです。

最後にイエスさまは仰いました。「さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」

<捨てた石が親石に>

これを聞いていた民衆は、イエスさまに「そんなことがあってはなりません」と言いました。これは、主人が、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人に与えることがあってはならない、という意味ではなくて、農夫たちが、主人に返すべきものを返さず、愛する息子を殺してしまうなんてことがあってはならない、と言っているのでしょう。

これに対して 17 節、イエスさまは彼らを見つめて言われました。

「それでは、こう書いてあるのは、何の意味か。『家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。』その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」

これは、このぶどう園と農夫のとえの、要約のようなものです。

「家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。」

この御言葉は、今日読まれた旧約聖書の詩編 118 編から引用されています。石を材料にして家を建てる時に、家を建てる人は、どの石をどこに使うかをよく調べ、吟味して、それを使ったり、不要と判断して捨てたりします。

人間がそのように判断し、捨ててしまった石。しかしそれは、本当は神さまの目から見れば、建物全体を支えるような、最も重要な石であった、ということです。神さまの御業、御心は、人の思いや判断を、遥かに大きく超えているものなのです。

つまり、「捨てられた石」は、律法学者や祭司長たち、民の指導者が、自分たちのプライドと人気を守るために、邪魔だ、不要だ、自分たちにとって価値がない、と判断して殺そうとしている、イエスさまのことです。

さきほどのたとえで言えば、農夫たちが、ぶどう園の収穫を自分のものにするために、ぶどう園の跡取り息子を邪魔に思って殺してしまった、というところです。

家を建てる者の捨てた石。人が自分の価値観で、勝手に判断をして捨て去ってしまう石。人々に捨てられ、拒まれ、受け入れられないイエスさま。

しかし、実はこの方こそ、神さまがすべての人類の罪を赦し、命を与えるために遣わされた、愛する御子。救いの御業を成し遂げられる唯一のお方、救い主なのです。本当はこの石こそ、神さまが用いようとなさる、最も貴重で価値ある石、隅の親石となるべき石なのです。

イエスさまは指摘されたのです。神さまの御心、神さまの救いのご計画を、あなたたちは分かっていない。自分たちの思い、自分たちの利益、自分たちの願いを見つめるあまり、あなたたちは神さまの御心を見失い、判断を誤っている。本当に大切なものが、わからなくな

っている。神さまの御心をこそ見つめなさい。語られている御言葉をしっかりと聴きなさいと。

すべての人は、神さまの御心を見つめ、成し遂げて下さる御業を信じ、受け入れるのでなければ。イエスさまを救い主として受け入れるのでなければ。罪の赦しを、救いの恵みを、神さまと共に生きる新しい命を、受け取ることは出来ません。救いを拒むならば、救われないうのは当然のことです。それが、「その石の上に落ちる者はだれでも打ち砕かれ、その石がだれかの上に落ちれば、その人は押しつぶされてしまう。」ということなのです。

祭司長たちや律法学者たちは、イエスさまが語られたことが、自分たちのイエスさまへの態度を指摘するもの。「当てつけ」であると気付きました。

しかし彼らは、これらを聞いても、まだ目を覚ましません。それでついに、イエスさまに手を下し、殺そうとしました。しかし、民衆を恐れて、彼らはそれが出来なかったのです。

ここでさらに、彼らが本当に恐れているのは、裁きを行なわれる「神さまの眼差し」ではなくて、自分たちの人気を左右する「民衆の目」であることが明らかにされています。

彼らの姿は、まさに神さまの御心から遠く離れ、罪にしっかりと捕らえられてしまった、罪人の姿なのです。

…しかし、このように神さまの御心に背く者たちの姿は、決して人ごとではありません

民衆は、イエスさまの御言葉を聞いて、「そんなことがあってはなりません」と言いました。しかし最後には、律法学者たちや祭司長たちと共に、民衆も、そして弟子たちでさえも、イエスさまを裏切り、見捨ててしまったのです。

わたしたちもまた、「そんなことがあってはなりません」と言っている場合ではありません。わたしたちもまた、神さまの思いよりも、自分の思いに従っている。神さまの眼差しよりも、人の目を恐れ、気にしてしまう。主人の思いを裏切り、御心を拒んでいる者なのです。

ここに語られたことは、まさに、わたしたちの罪の姿を示しているのです。

<神さまの御心>

[神さまのもの]

さて、このぶどう園と農夫のたとえで、わたしたちが見つめなければならないことが、いくつもあります。

まず一つは、わたしたちの主人は神さまであり、わたしたちは自分の持ち物、自分の思い通りにして良いものなど、何ひとつ持っていない、ということです。

神さまは、わたしたちに必要なものを、すべて与え、わたしたちを養い、導き、生かして下さっています。生活も、日々の糧も。地位や能力、健康、時間。家族、友人や、関わる人々。そして、環境や、この世界のすべても。あらゆるものは、神さまの良いご計画に従って、わたしたち一人一人に預けられているものなのです。そして、わたしたちは、自分自身も、神さまのものであることを忘れてはなりません。

神さまは、わたしたちが預けられ、与えられているものを、神さまの御心に適うことのために、用いたり、大切にしたりすることを望んでおられます。

神さまの御心。それは、わたしたちが神さまを知り、神さまと共に生きることです。そして、神さまを愛し、神さまに愛されている自分を愛し、また共に神さまに愛されている隣人を愛することです。神さまの愛に生きるために、わたしたちには必要なすべてが与えられています。そのことを忘れてはなりません。

しかしわたしたちは、その神さまの御心を忘れると、持っているものを自分のものだと思い込み、自分がそれらの主人となって、自分の思うように支配しようとしたり、利用しようとするようになってしまうのです。

[神さまの期待と忍耐]

そしてもう一つ見つめるべきことは、わたしたちがそのように罪深く、忘れっぽい性質であるにも関わらず、神さまは、ご自分の大切なものを、わたしたちが自由に、喜んで用いることが出来るように、すっかり委ねて下さっている、ということです。

神さまは、わたしたちが神さまの恵みに応えて、神さまの御心に従って歩むようになることを、心から期待しておられます。わたしたちのことを、深く信頼しておられます。そして、そのように歩むようになることを、大変な忍耐をもって、待って下さっているのです。

今日のたとえも、よく考えたら、とっても不思議じゃないでしょうか。

一人目の僕が、袋叩きにされて、手ぶらで返された。普通ならこの時点で、主人は怒り狂って、農夫たちをボコボコにして、ぶどう園から追い出してもおかしくないのです。

でもそうはせずに、二人目、三人目を送った。みんなボロボロにされてきた。それなのに、最後に愛する息子を送る時の、主人のこの言葉です。「わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。」

…どれだけお人好しなんでしょうか。こんなに酷い農夫たちを、どうして「敬ってくれるだろう」などと信頼して、期待することが出来るのでしょうか。

僕が受けた仕打ちは、主人に対する仕打ちといっても構いません。農夫たちは、とっくに主人のことを、自分たちの主人だなんて思っていないのです。むしろ、早く関係を断ち切りたいと思っているのです。

しかし主人は、どれだけ自分が侮辱され、傷つけられ、蔑ろにされても。それでも農夫たちに語りかけるのをやめず、自分の最も大切なものを差し出してでも、関係を続けていこうとするのです。

わたしたちの主人である神さまとは、そのようなお方です。わたしたちのことを愛し、憐れみ、期待し、諦めず、良い関係を築きたいと、どこまでも望んで下さっているのです。

それなのに、農夫たちは、わたしたちは、その主人の思いを拒んで、受け入れない。逆ら

い、抵抗し、傷つけている。いつの間にか、自分の人生の主人が神さまであることを忘れ、自分の思いに従って、自分の願いに従って、人生を歩もうとしているわたしたちです。

そしてまさに、そんなわたしたちの罪が、イエスさまを十字架の死へ追いやったのです。

[救いの御心]

イエスさまはたとえの最後に言われました。「さて、ぶどう園の主人は農夫たちをどうするだろうか。戻って来て、この農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるにちがいない。」…話がここで終わってしまえば、これはもはや、裁きの宣言でしかありません。

しかし、イエスさまは、この後に、あの詩編の御言葉を語って下さいました。

「家を建てる者の捨てた石、／これが隅の親石となった。」

…神さまは、愛する息子を殺されて、わたしたちを滅ぼすことはなさいませんでした。

なお、そうして命を捨てられたイエスさまの十字架の死を、わたしたちの罪の贖いとして下さったのです。このイエスさまの十字架において、救いの御業を成就して下さいました。

まさに、わたしたちが捨てた石を、神さまは隅の親石、わたしたちすべての人間の命を支え、生かす、要の石として下さったのです。

イエスさまが、たとえの後で、この御言葉を語って下さったのは。それでも農夫たちの罪を赦し、わたしたちの罪を赦し、生かそうとして下さる。その、神さまの救いの御心を教え、救いの約束を示して下さいました。

詩編はこう語っています。「家を建てる者の退けた石が／隅の親石となった。これは主の御業／わたしたちの目には驚くべきこと。今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。」

これは主の御業。わたしたちの目には驚くべきこと。神さまの御心も、神さまの御業も、わたしたちには想像も及ばない、驚くべき恵みに満ちたものなのです。

わたしたちは、それほどの神さまの愛、神さまの憐れみの中で、今日もイエスさまの十字架によって与えられた命に、生かされているのです。

どうかわたしたちが、この、神さまの恵みの御心を深く知り、神さまの思いに従う者となることが出来ますように。

【お祈り】

天の父なる神さま

神さまの愛と、憐れみ深い心を、どうかわたしたちに深く覚えさせて下さい。

神さまの救いを、愛する御子イエスさまを、わたしたちが、驚きと、感謝と、喜びをもって、心から大切にお迎えし、受け入れることが出来ますように。

そして、神さまの御心に従って歩む者へと、わたしたちを新しく造り変えて下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン